

「A TIME TO CHANT :
The Soka Gakkai Buddhists in Britain」カーレル・ドベラーレ
ブライアン・ウィルソン

共著

山中 弘

現代イギリス社会の一つの特徴は社会的、宗教的多元化である。イギリス国教会を国の宗教とするプロテスタント国家イギリスは、現実には大英帝国の負の遺産ともいえる移民の流入によって、宗教を異にするさまざまな民族集団が生活する多元的社会へと変貌を上げている。バハイ教、統一教会、ハレ・クリシュナ運動などさまざまな出自をもつ新宗教の流行も、この多元化状況を反映するものといえよう。こうした宗教は一九六〇年代から主に若者たちを中心に成長し、マス・メディアの報道を通じて一般の人々にも注目されるようになってきている。

キム・ノットによれば、イギリスないしヨーロッパにおける新宗教の流行は単に社会の多元化という文脈だけでなく、西欧社会の世俗化という文脈からも見る必要が

ある⁽¹⁾。つまり、新宗教の流行という問題は、西欧各地で観察されるキリスト教の衰退といういわゆる世俗化の進展の中で、若者たちが再び宗教に向かっているように見える現象は何を意味するのかという視点と不可分に結びついているというのである。それは宗教の再活性化の徴候なのか、それとも世俗化社会の現実的表現なのか。この世俗化解釈をめぐる学者たちの議論は現在でも続いているが、それについてはこれ以上述べるつもりはない。ただ、本書の著者たちがともにこの世俗化論の代表的論客であり、特にウィルソンが宗教集団論の権威でもあることも考えあわせれば、本書で著者たちが世俗社会イギリスでの創価学会をどのように理解したのかは興味のもてるところである。

さて、本書は、副題からも明らかなように、著名な宗

教社会学者であるブライアン・ウィルソンとカーレル・ドベラーレの手になるイギリス創価学会員の社会的属性や意識に関する非常にインテンシブな実証的研究である（なお、創価学会と日蓮正宗の断絶にともなって、イギリスの組織の正式名称も Nichiren Shoshu UK から Soka Gakkai International UK へと変更された。したがって、小論でもこの組織の表記はこの名称の略号である SGI-UK とする）。本書の構成は、序論と結論的部分にあたるエピソードを入れて全部で十一章から成っており、その他に付録として、今回の調査の質問表、面接内容とともに、最近の創価学会と日蓮正宗との分離問題を扱った短い論文がつけ加えられている。全体として、各章ごとに彼らがおこなった調査結果の紹介とそれに対する分析が語られており、その意味で、この著作は SGI-UK の全面的協力のもとにおこなわれたこの組織の学問的な実態報告書という性格をもつものといえる。そして、そこに本書の最大の魅力もある。したがって小論でも、今回の調査によって初めて体系的に明らかにされたこの運動の現状に関する調査結

果の整理を中心に行うことになる。まず、両氏がとった調査方法から紹介すれば、SGI-UK 本部の協力をえて、約五、〇〇〇名とされる会員総数の中で名前と住所がはっきりとしている三、六〇九名のうち、日本人とわかるメンバーをのぞいた約三、三〇〇名を母集団として、そこから一、〇〇〇名をランダムに抽出して質問表を送付するとともに（回収率は約六二％）、彼らの一部に対して面接調査も併用するというものである。なお、メンバーシップの基準は日蓮正宗の僧侶によっておこなわれる本尊授受の儀礼である「御授戒」を受けて、信仰対象である本尊を保持している者とされている。またイギリスへの創価学会の進出の契機に関しては、日本から派遣された日本企業の社員やイギリス人のビジネスマンと結婚した日本人の妻のように日本からの信者の移動が決定的な意味をもっている。

さて、本書から浮かび上がってきた SGI-UK の組織形態や活動内容、メンバーの社会的属性などを簡単に紹介してみよう。SGI-UK の組織は、地域を単位とした

組織がイギリス本部を頂点としてヒエラルヒー的にまとめられており、その点では日本の組織と同様のタテ型の組織形態をとっている。メンバーは性別によって男性部(Men's division)、女性(Women)部、男子青年(Young Men)部、女子青年(Young Women)部に分かれている。医者や音楽家など職業ごとに各種のグループがあり、さらに、heritage groupと呼ばれる民族別の組織もある。また、主に本部での雑用を担当する VCG (Value Creation Group) と Lilac という奉仕グループもある。活動の中心は、日本と同様に、法華経の読誦や南無妙法蓮華経という題目の唱和(唱題)、座談会である。日蓮仏教の勉強(教学)も積極的に奨励され、南フランスにあるヨーロッパ・センターでの研修会もおこなわれている。また、文化祭や展示会などの各種文化活動にも熱心に取り組んでいる。財政的には、日本の本部から独立しており、その財政は、機関誌である UK Express の講読料、本部の売店での売上、仏具の販売、そして三カ月に一回の広宣流布ファンドへの寄付などで賄われているという。

メンバー全体の男女比は女性が多く、約六割が女性である。彼らの居住地の分布はロンドン、ミドルセックス、サリーなどロンドンを中心とした南西部が全体の六割以上を占めている。特に、ロンドンへの集中は顕著で五割弱を数えている。メンバーのほとんどは西欧人であるが、約一割は非西欧人である。また、出生地は七割がイギリスである。彼らの年齢は三九歳以下の若い人々が最も多く、全体の六〇・四%に相当する。この年齢層の相対的な低さは、同時に彼らの信仰年数の相対的短さを意味している。彼らは自分の意志で入信した信仰第一世代であり、入信して十年ほどのものがおよそ半数を占めている。また、彼らの入信年齢層(唱題開始年齢)は、平均で三十一・三三歳、中央値で二九歳、最頻値で二五歳となっており、当初よりこの運動が比較的若い人々を中心にしていたことを示している。ただ、メンバーの入信年齢が、キリスト教の回心の場合によく指摘される思春期と呼ぶには相対的に高く、また、二二・三歳の若者たちを引きつけている統一教会、トランセンデンタル・メディテー

ション(T・M)とも年齢層が若干異なっているという指摘は興味深い。

メンバーの年齢層の相対的低さは、彼らの「婚姻状況」にも表れている。彼らの中で独身者の比率は非常に高く、全体の三四・五%を占めている。ただ、これは年齢層の低さだけではなく、彼らの中に離婚ないし別居している人々が多いことにも関係している。このカテゴリーに入る人々がイギリス全体で四%であることを考えてみると、メンバーの中に離婚ないし別居者が一七・四%いることは非常に高い数字であることがわかる。彼らの生計の手段は自営業の割合が非常に高く、ほぼ三分の一にあたる三一・八%になっており、経済的に独立性の高い人々の比率が高い。業種的には製造業や産業労働にかかわっている人は少なく、福祉医療関係、音楽家、芸術家などが非常に多い。これらは、責任と創造性を強調するこの運動のイデオロギーと親和性をもっているという。彼らの教育レベルを見ると、約三割が初等教育のみであり、四割が中等教育以上、二割強が高等教育を受けてい

ることがわかる。これは、日本と違って高等教育を受ける比率が相対的に低いイギリスの教育状況を考えれば、メンバーの年齢層が相対的に低いことを差し引いても教育程度の高い人々の割合が大きいということになる。

次に、彼らの意識に関する調査結果をいくつか要約してみよう。まず、入信の媒介者であるが、約四二%が友人の紹介を挙げ、次に家族のメンバー、パートナーが二%と続いている。媒介者とされたものは年齢と相関性があり、年齢が高いほど友人を挙げる人が多く、三十代以下になると家族やパートナーが多くなり、入信の経緯で大きな役割をはたしているのは個人的接触であることがわかる。また、日本人は接触の重要な媒介になっておらず、その意味でこの運動の土着化が指摘されていることは興味深い。

SCI-UK のどこに引かれたのかという問いに対して、三分の一がメンバーの質(人格や開放性など)を挙げている。約二〇%が直接的な利益に引かれたと答え、約一六%が組織自体の性格に引かれたという。年齢による相違は

それほど大きくない。彼らの宗教的背景との関連でみると、キリスト教と関係のないものがメンバーの質を選択するのに対して、そうした背景をもつものは現世的利益や幸福や自信 (self-confidence) への期待を魅力の源泉としている。この最初の動機が現在でも継続しているのかに関しては、五割強の人が肯定的に答えているが、メンバーの質という理由は非常に低くなっている。持続している場合には、最初の理由とは異なった別の説明を見出している。具体的には、倫理的動機、個人的幸福と自信、知的満足などが大きく増えており、全体としてみれば、個人的幸福と自信、実用的利益、倫理的動機の順になる。これは、組織がメンバーに対する再社会化に成功していることを意味している。つまり、最初の動機とは異なった新しい目標を与えることによって、メンバーであることを持続させているわけである。

それでは、こうした点に魅力を感じた人々は、いったいどういう悩みをもっていたのだろうか。つまり、SGI-UK へと引きつけられた人々の内面には何があった

ろうか。五四%が家族がメンバーではないと答えているのに対して、メンバーが親族にいと答えたうち二六%が妻やガールフレンドなどのパートナー、一五%が両親などの身近な家族がメンバーであるとしている。三三%が一八歳以上の子供がいるにもかかわらず、子供もメンバーである比率は四人に一人にすぎない。ここから明らかのように、SGI-UK の信仰は家族という基盤が十分でない。友人関係はどうだろうか。約三六%が友人の少数がメンバーであり、三三%が親しい友人の半分がメンバーで、約一九%が親しい友人の大多数がメンバーである。また、友人の非メンバー率は入信年数と関連している。信仰を反対された者は五割強で、そのうちおよそ三六%が家族からであり、二三%ほどは友人である。その理由の大多数は信仰、活動、唱題などであるが、特に唱題はその長さなどから家族問題になることがあるという。

次に、SGI-UK のメンバーはどのような価値観を抱いているのだろうか。その特徴をヨーロッパ価値調査の

たのかということである。プッシュ要因として、宿命感、孤独、人生の危機、緊急事態などが指摘されているが、人間関係、特に結婚ないしパートナーとの関係上の悩みが最も多い。こうした要因は他のキリスト教のセクトとも類似性をもっているが、実践性と速効性という点で SGI-UK は特異な位置を占めているという。メンバーの入信以前の宗教的背景については、八割近くの人が特定の宗教的組織に属していなかったと答えている。回答者の半数以上が自分を宗教的だったと答えているが、そうではなかったとするものも少なくない。キリスト教の教派に属していたのはごく少数で、カトリック(八%)、国教会(六%)、非国教徒(三%)の順である。また、他の東洋宗教を知っていたかという質問に対しては、六%が肯定的に答えており、彼らが東洋宗教に特別な関心をもっている人々に限られていないことがわかる。全体として、宗教的なものを求めているということが必ずしも入信の条件とはいえないようである。

次に、メンバーを取り囲む人間関係についてはどうだ

データと比較することで、全体社会とメンバーたちの価値観との相違がわかる。まず、仕事、家族など、最も価値をおいているものは何かという問いに対しては、家族が両方とも第一位となっている。次にメンバーでは宗教となるが、仕事も全体に比べて高い。これは、SGI-UK が自己決定を重視し、自営が多いことにも由来している。友人と答えた割合も他に比べて多く、また政治への関心が高いことも窺われる。特に人種差別、エコロジー、失業、非武装などの問題に強い関心を示しているが、直接的な国内の政治問題への関心とは区別すべきだという。

メンバーの倫理的、道徳的態度はどうだろうか。フリーセックスへの反対がメンバーで二四%であるに対して、ヨーロッパ価値調査では六〇%とかんがりの開きがみられる。著者たちによれば、これは SGI-UK のイデオロギーの中にある外的道徳の無力視(未法観)と個人の態度決定の重視に関連しているという。同性愛などの問題に対して宗教団体が積極的に発言すべきかという問いに対して、一般では半数以上が肯定的であるのに対して、メ

ンバーでは三分の一しか肯定的でない。こうした問題は全体の問題ではなく、個人の問題であるという意識が強い。著者たちは、これらを、宗教が伝統的に担ってきた社会化と教育的媒介という役割とはまったく違った道德の個人主義化、特定の道德的強制の拒否と解釈している。つまり、メンバーは状況倫理的なのである。仕事に関しては、メンバーは高い価値を与えているにもかかわらず、価値観としては物質主義ではなく、むしろ物質的な満足是第一義的なものにならない「ポスト物質主義的」であるという。一般の人々が二一%となっているのに対して、メンバーの七五%がこの立場を表明しており、年齢層の偏りを考えてもこの傾向がはっきりと出ている。彼らの仕事の重視が物質主義的な目的ではなく、それ自体に喜びを見出し人生に意味を与えてくれるもの、個人のアイデンティティとかかわっているものと理解されているということである。また、レジャーを大切に、文化・美術活動にも積極的であり、環境団体などの他の組織ともかわっているメンバーも多い。

それでは、メンバーはどれほど組織に関与しているのだろうか。組織の形式的構造、権威、性別組織に疑問を感じるものもいるが、全体として、組織を積極的に肯定している。ただ、会員歴が浅いメンバーは依然として組織に対する不満を感じている。特に、池田SGI会長の存在や性別組織、VCG、Lilacという奉仕組織などに不満を感じている。しかし、全般には活発な自発的な組織的奉仕をメンバーから引き出しており、特に若い人々の方が組織への関与度が高く、三〇歳以下で五三%となっている。この組織への奉仕の関与度は組織の中に友人がいるかどうかにもかかわっている。友人がいない場合、奉仕を経験しなかった比率が最も高い。同様のことはフランスでの研修会の参加状況でもいえ、友人がまったくいない人々の七一%が参加したことがないと答えている。また、入信年数、役職の高さと研修会への参加の頻度も相関性が高い。日本と同様な任命制である役職については、メンバーの四一%は無役であるが、二三%がグループ・リーダー、二一%が地区組織で責任をもっている。

る。役職と入信年数との間にも相関がある。さらに、運動の中の友人の有無と役職とも相関がある。友人関係が薄い場合は五八%が無役職者であり、友人関係が強い場合三〇%が無役職者である。年齢が高くなれば、さらにこの関係がはっきりとする。また、職業とも相関しており、主婦、退職者、失業者は少なく、有職者、自営業者は役職率が高い。これは、この運動が社会的にも多忙な人々から組織的な奉仕活動を引き出していることを示している。

最後に、メンバーの唱題実践の状況とそれをおこなう理由を見てみよう。ほぼ九〇%が少なくとも平均で一日に一回唱題している。半分以上が二回であり、逆に四%が一週間に一回も唱題していない。唱題の頻度の比率も友人の有無と同様に、運動への関与にかかわっている。友人が運動内に多ければ唱題の頻度も高くなる。この傾向は特に若者の場合にいえるという。したがって、SGI-UKは個人主義的で、隔離的な共同体ではないけれども、その実践を続ける場合に友人の支援的な文脈は

非常に重要だといえる。なぜ唱題するのかについては、物質的利益を含めた直接的な利益を獲得したいという理由も少なくないが、健康、よい職業や人間関係をえたいという希望も多い。これには正規に結婚していない人々がメンバーに多いことにもかかわっていると考えられる。全体として、メンバーの中心的関心は自己増進と自助であるという。唱題の主観的影響はどうだろうか。特定の願いをもって唱題した九六%のうち、九三%が願いがかなったと考えている。組織へのコミットメントが少ない人々は功德をあまり感じていない。全体としてみれば、否定的な回答者もいるが、多くの人々は唱題が目に見えない功德を生み出していると感じている。約三九%がそれを自信、勇氣、強さ、安定感、自尊心などの増大としている。唱題は単なる祈りではなく、ある種の治療効果をもっているという著者たちの指摘も興味深い。

以上、本書によるSGI-UKの詳細な調査結果の一部を簡単に整理してみた。最後に、この著作に対する評者の意見を少し述べてみたい。評者の論点は次の三点であ

る。①SGI-UKの組織の現状に対する組織論的位置づけに関する私見、②日本の新宗教の海外進出という問題、③SGI-UKの対する著者たちの評価について、である。まず、①から述べてみよう。この問題を考える上で、イギリスのキリスト教会の成長と衰退を統計的に分析してその一般理論を提出しているカリ、ギルバート、ホースリーの理論の一端を参考にしてみよう。⁽²⁾紙数に制限があるので、ここでは、彼らが諸教会の成長と衰退の局面をメンバーのリクルート先と関連づけて論じている箇所と教会の支持層の有無という点にのみ言及することにする。彼らによれば、教会員のリクルート先は、メンバーが教会の内部からリクルートされる「自己内生産的」と、外側からリクルートされる「自己外生産的」の二つに大別される。前者は教会員の子弟の入信などを指しており、後者は当該教会とは関係をもっていない人々の入信を指している。成長期の教会は、当然後者の類型のリクルートのパターンを示しており、停滞期のそれは前者のパターンをとるようになる。特に、当該教会がその外側か

ら多くの若い人々を獲得することに成功すれば、彼らのもつ高い出生率によってメンバーは一気に拡大することになる。反対に外側からのリクルートが滞り、メンバーが次第に高齢化していけば教会のそれ以上の発展は期待できない。また、当該教会の成長ないし衰退は、それを支える特定の支持層の拡大ないし没落にも規定される。その一例として、彼らはメソディズムを挙げ、その盛衰は産業革命の進展に伴う手織工という社会層の増大と没落に大きく規定されていたと述べている。

これらの指摘をSGI-UKに当てはめてみるとどうなるだろうか。メンバーのリクルート先は、組織の外側の比較的若い層であることが今回の調査から明らかになっており、その点からすればSGI-UKは組織の拡大期の局面にあるといえる。また、支持層という点からしても、この運動は特定の関心を共有している人々を引きつけており、彼らが現代社会の中で増加傾向にある人々であることを考慮すれば、こうした「潜在的支持層」の拡大傾向は、運動の将来が必ずしも暗くないことを暗示してい

るように思われる。しかし、メンバーの中で別居者や同居者が多くいることは、彼らが出産によってメンバーを増やしたり、家族という安定的な信仰を持続する基盤をもっていないことを意味している。しかも、組織外の非メンバーが潜在的な信者へと移行していく際に重要な要因であるとされる、当該宗教の「近接性」や文化的「類似性」などの諸点も、外来宗教であるSGI-UKの場合には不利といわざるをえないのである。

こうした不利な条件にもかかわらず、この運動が現在までのところイギリスに定着することに成功しているのは、組織がメンバーないし潜在的な支持層の欲求を何らかの仕方ですばやく喚起しているためと解釈できよう。カリ等は、教会が提供する「有用性」も非メンバーからメンバーへの移行を押し進める重要な要因であるとしている。ここでいう有用性の中身は宗教的、儀礼的、組織的な満足ということであるが、これらの提供が運動の持続にプラスに働いていると予想される。特に、組織的要因がこの運動の成功に果たす役割は大きいように思わ

れる。信仰の持続という点からみても、彼らの信仰は、唱題による願いの成就という主観的満足を除けば、組織的コミットメントとその過程で生まれる組織内部での人間関係、さらに組織が提供する役割に伴う責任感に大きく支えられていることがわかる。P・バーガーの言葉を援用すれば、人間関係とそれを作る場としての組織活動が、信仰の枠組の自明性を支える「信憑性構造」となっているわけである。運動の内部における友人の多寡が唱題や研修会の出席の頻度などの信仰活動の強弱を左右しているという今回の調査結果は、明らかにこのことを示している。なかでも、信仰や生活に対する役職者によるきめ細かい「指導」によって、信者は組織の中にうまく再社会化され、自分たちが従来もっていなかった組織へのコミットメントの必要性を教えこまれ、それがさらに組織の中での人間関係によって確認されるという方向が認められるのである。日蓮正宗の僧侶ではない俗人の役職者によっておこなわれる「指導」という創価学会の信仰監督のシステムは、組織のイデオロギーの浸透を助ける

とともに、役職者自身の組織へのコミットメントをよりいっそう強めるという機能をはたしている。それはメンバーを組織の中へと再社会化することによって、比較的独立性の高い人々から成っている彼らをタテ型の組織へと包摂することを可能にしていると見ることができる。

創価学会の日蓮正宗からの分離がイギリスでほとんど深刻な波紋を投げかけていないことも、信仰を維持し強化する重要な担い手が、緊密な人間関係を背景にした俗人の役職者たちであるという事実からすれば当然であるように思われる。

次に、②の日本の新宗教の海外進出の問題に目を向けてみよう。この問題は既にわが国でも宗教学者である井上順孝氏、中牧弘允氏などによって取り組まれ、新宗教の海外への適応に関して新宗教の「多国籍化」という概念なども提出されている⁽³⁾。この概念自体はまだ十分に洗練されたものとは思われないが、新宗教の「多国籍化」の「戦略」として、中牧氏は、(1)使用言語の現地化、(2)現地の生活様式への適応、(3)現地人の積極的登用、(4)多

国籍的ネットワークの拡大、(5)「きめ細かい生活指導」などを挙げている⁽⁴⁾。こうした指標からすると、SGI-UKは明らかに「多国籍化」ないし現地化に成功している。

日本人たちだけが自らのエスニシティを確認するためにこの運動を維持しているのではなく、現地の白人を中心として受容されている。「折伏」は全面に打ち出されず、日本の創価学会やアメリカのSGI-USAのストリート折伏に見られるようなアグレッシブな布教形態はとられていない。これも現地の生活様式にあわせた結果ということになる。ただ、日本の創価学会の特徴をそのまま持ち込んでいる側面も多数あり、それがメンバーの反発を生んでいるということもある。調査結果を見た限りでは、その反発は大きくなく、組織的な社会化によって吸収されている。ただ、この調査はあくまでも主に現在組織に残っている人々を対象にしており、どの程度この要素が組織にマイナスになっているかははっきりしない。また、メンバーの数がそれほど大きくないということも重要な要因であるように思われる。

最後に、著者たちのSGI-UK評価という問題について考えてみよう。この点は、著者たちがSGI-UKをどのような広い社会的文脈に位置づけているにもかかっているもので、少し彼らの主張を要約してみることにする。

彼らは、まず現代社会の特徴を消費社会としてそれ以前の生産者の社会と対比する。生産者の時代において、禁欲や自己抑制が重要であり、禁欲がキリスト教の道徳の中心にあった。しかし、消費社会の到来とともに、キリスト教の古い禁欲倫理は不適切になり、新しい倫理が要請される。新しい倫理は消費を正当化し、快樂主義を促進し、自己放縦を肯定する。人格的な神への信仰が衰退して、非人格的な生命力が近代的思想と適合的になる。これが、新宗教が登場する一九六〇年代以降の西欧社会の状況であるという。著者たちによれば、SGI-UKは末法という思想に示されるようにこの時代に適合的なメッセージをもっている。その寛大な倫理、個人的幸福の追求の是認、自己実現の強調、科学的思考との親和性は、キリスト教以降のイギリス社会に適合的なのである。さ

らに、SGI-UKは、非人格化の度合いを強める社会と個人とを結び付ける自発的構造をもったアンソニエーションと解釈できるという。現代社会において伝統的な構造化された制度的関係の外側にいる人々が存在し、彼らの中には、個人の価値を確認してくれる支援的つながりの必要性を強く感じている人々がいる。SGI-UKのメンバーに芸術家、自営業、あるいは婚姻関係が安定しない人々が多いことは、この運動がそうしたアンソニエーション的な機能をはたしている証左ともいえるというのである。

この評価はウィルソンとドベラーレの二人のものであるにしても、評者の知る限り新宗教運動の機能をどちらかといえば否定的に考えていたウィルソンの見解からするとやや意外な感じがしないでもない。かつて彼はカルト的新宗教について次のように述べている。「実際、多くのカルトが長期間持続し得る能力があるかどうかという点については大いに疑わしい。持続するためには制度化されなければならないが、……それらのカルトの担い

手は大部分が若い成人であり、そのため、会員の子供たちを社会化する技術をもち合わせていない。カルトは……生き残るための適応という試練に耐えなければならぬ。しかしいまだに、そうした適応能力を示したカルトはほとんどいない⁽⁵⁾。このように、ウィルソンは、新宗教運動をますます進展する社会の合理化の中で無力に反発している若者たちの運動と理解し、それらは現代社会の中で積極的役割りを果たすことなくいずれ消滅することになる短命な運動と考えていた。もちろん、彼は SGI-UK をこの引用に見られるようなカルト的な新宗教に含めていないように見える。しかし、現段階では家族的基盤の弱さなどに示されるように、SGI-UK が長期的存続のための条件を満たしているとは即断できず、ウィルソンの上述の批判が特殊なカルト的新宗教だけに当てはまるようには思えない。しかも、五、〇〇〇名足らずのこの運動の規模からいって、SGI-UK がもっている意味をあまり過大評価すべきではないだろう。単純に組織的規模からしても、それは統一教会一、四〇〇名

に比べれば大きい、ハレ・クリシュナ運動の半分以下にすぎない。さらに、イギリスの宗教状況全体から見れば、新宗教よりも、既存の制度的教会とは一線を画したペンテコステ系や福音系の独立したキリスト教が勢力を伸ばしており⁽⁶⁾、キリスト教的価値観は決して過去のものになったとは思われない。少なくとも、ヨーロッパ価値調査によれば、イギリス人はその他のヨーロッパ諸国に比べて道徳的な傾向をもっていることが指摘されており⁽⁷⁾、その点で SGI-UK のメンバーが表明している状況倫理的で寛容な道徳意識はイギリス社会ではあくまでも周辺のものに留まっていると見るべきなのである。また、イスラム教やヒンドゥー教などのアジアの移民たちの宗教が国内で急速に増加しているという背景の中で、政府が宗教的授業を通じてイギリスがキリスト教国家であることを確認しようとしていることに象徴されるように、少なくとも「文化宗教」としてのキリスト教は依然としてイギリス社会の中心にある価値観を支えているように思われる。SGI-UK の存在は、まさにこうした宗

教状況の全体の中でこそ位置づけられるべきなのであり、現代イギリスの宗教状況全般に関心をもっている評者からすれば、キリスト教というドミナントな宗教の衰退を暗黙の前提にしているように見える本書の SGI-UK 評価には少なからず不満を覚えたことも事実である。以上、本書を一読して評者が感じたことを少し述べてみたが、全体としてみれば、本書がイギリス社会に展開している日本の代表的な新宗教運動の現状を報告した一級の優れた調査資料であることは明らかであり、イギリスの宗教状況に関心をもつ者の一人として、著者たちの努力に心から敬意を表するものである。

註

- (1) Kim Knott, "New Religious Movements", in Terence Thomas (ed.), *The British Their Religious Beliefs and Practices 1800-1986* (London & New York: Routledge, 1988) pp. 159-160.
- (2) Robert Currie, Alan Gilbert & Lee Horsley, *Churches and Churchgoers Patterns of Church Growth in the Brit-*

- ish Isles since 1700* (Oxford: Clarendon Press, 1977) pp. 75-90.
- (3) 井上順孝「海を渡った日本宗教 移民社会の内と外」(弘文堂、一九八五年)。中牧弘允「新世界の日本宗教 日本の神々と異文明」(平凡社、一九八六年)。
 - (4) 中牧、同上書、一五四―一六六頁。
 - (5) フライアン・ウィルソン、井門富二夫・中野毅訳「現代宗教の変容」(ヨルダン社、一九七九年)一六八―九頁。
 - (6) 拙稿「現代イギリスの宗教事情と移民」『人間文化』、愛知学院大学人間文化研究所紀要、一九九三年、八号。
 - (7) Kenneth Thompson, "How Religious are the British?" in Thomas (ed.), op. cit., p. 229.

(やまなか ひろし・愛知学院大学助教授)